

●川島素晴 (1972~)

管弦楽のためのスタディ 「illuminance / juvenile」 (2014/20)

とかく現代音楽は「暗くて難解」と思われがちである。「明るく」「楽しい」と思えて、しかも特殊奏法や特殊楽器を極力排除する。それでいて単に保守的なのではなく、真に今日的な「現代の音楽」はあり得ないだろうか——という問題意識が本作の出発点であった。2014年に比し、それをクリアする作品は増えつつあるが、6年を経てもなお、アクチュアルな問題であり続けているし、はからずも今年は、そういう問題意識が俄然、より深い意味を帯びたように思う。

第1楽章「illuminance」——物理学・光学でいう「照度」の意味。

「音」は光らないにもかかわらず、我々は、「明るい音」等の用語によって、音の明るさを表現する習慣がある。この章では「燦めく鳥」「乱反射」「閃光」「流星群」「太陽柱」「裏後光」「オーロラ」「月暈^{つきがさ}」「クラゲ」「蛍」「ダイヤモンドダスト」「白夜」「微かな炎」「雪明り」「曙光」「灼熱の太陽」「木漏れ日」「天の川」「魚群」「虹」といった、20に及ぶ自然界の「光の現象」をテーマにイメージが紡がれ、織り成していく。

第2楽章「juvenile」——幼年性、少年・少女向けの、といった意味。

万人にとって「楽しい」と感じる表現というのは、甚だ難しい。そこで私は、この章で行う音楽的事象を、子ども目線で純粋に楽しいと感じるであろう素材に限定することにした。例えば、管弦楽の前に立ちただかる指揮者という存在はそれだけでもおかしなものである。この章では、「cond. actor」(演じる指揮者)を通じて、様々な音による「遊び」を繰り広げる。

日本では古来、音楽演奏のことを「遊び」と称していた。いつから「演奏」が「遊び」と区別されるようになったのであろう。例えば英語の「play」やドイツ語の「Spiel」は、今日においても「遊び」と「演奏」両方の意味を持つ。「演奏」とは即ち「音で遊ぶ」こと——これは

古来、世界共通の感覚であるはずだ。

先入観を捨てて、指揮者の身振りや音、出来事の一部始終を、注視して頂きたい。

[川島素晴]

2 Fl (2 Picc) / Picc / 3 Ob / 3 Cl (Es-Cl / Bs-Cl) / 3 Fg (C-Fg) / 2 Sax (S & T / S & Br) - 4 Hrn / 3 Trp (Picc) / 3 Trb (Bs-Trb) / Tub - Timp (Suspended Cym / Ratchet / Handcrank Music Box / 2 Sleigh Bells) - 4 Perc (I=Glock / Xialou / Rin / Flexatone / Antique Cym / Finger Cym / Snare Drum II=Antique Cym / Bell Tree / Tam-Tam / 3 Furins / 5 Mokushos III=Tubular Bells / Roto-Toms / Kin / Wind Chime / Vib / 3 Tri / Bass Drum IV=Vib / Xyl / Kin) - Hrp - Cel - Pf - Strings (min. 14-12-10-8-6)

※ 上記に掲載の編成情報はオリジナルの楽譜に基づいています。

●杉山洋一 (1969~)

『自画像』オーケストラのための (2020)

アウトリトラット(Autoritratto)とは、伊語で「自動抽出」より転じ「自画像」の意。

『自画像』は、自分が生まれ、シュトックハウゼンの『賛歌(ヒュムネン)』が完成した1969年から現在までの半世紀における世界各国の戦争紛争地域の国歌や州歌を、極力時間軸に沿って並置したもの。

一定の規模以上の戦闘は可能な限り収録したつもりだが、恐らく不備はあるだろう。書ききれない小規模のものは無数にあり、現在も続く。

各戦争、紛争に対して個人的感情は一切排除するよう留意し、多国間の戦闘において、ベトナム戦争なら南ベトナム、朝鮮戦争なら韓国のように、確認できる範囲で最初に攻撃を受けた側、もしくは排除された側の国歌を使用した。内戦の場合、パプアニューギニアやティモール、ピアフラ、クルド、チェチェン、北アイルランドのように州歌や県歌などが確認できる場合、それらを使用した。

各国歌は、戦闘当時に使用されたものを採譜し、ザイールやジョージア、アフガニスタン、ソマリアのように度々国歌が変更された場合、年代に応じてそれぞれが使用された。一つの戦いが終ると、新しい建国と共に新国歌が誕生し、国歌の歌詞にはそれぞれの歴史が刻み込まれてゆく。

新国歌がここで聴かれるのなら、残念ながら改めて戦闘に巻き込まれたことを意味する。日本の領有権問題は、客観的に規模を勘案し、ここでは取り上げていない。

自然災害、暴動、テロ攻撃などは基本的に排除したが、歴史的にその後の戦争の要因となった、ベルリンの壁崩壊、ソビエト連邦崩壊、9.11テロ攻撃のみ、敢えて節目として束ねたチューブラーベルを鳴らして分かるようにした。それ以外打楽器は一年毎の時間軸を規則的に打つ。

聴き分けるのは不可能なので、時代の流れを視覚的に追うべく、日本で使用される世界地図に沿って、木管群はベトナム、ラオス、ミャンマーなどのアジアからコソボなど中欧、北アイルランドまで、金管群はアメリカが主導するアフガニスタン対テロ戦争を除き旧ソ連諸国、第1ヴァイオリン奇数が南アフリカから中央アフリカ、偶数が北アフリカ、第2ヴァイオリン奇数がアラビア半島諸国、偶数がスリランカ、キプロス、シリア、イランからトルコまで、チェロ奇数はインドネシア、フィリピン、偶数が韓国、中国、ヴィオラは南米諸国、コントラバスが中米諸国と振り分けた。

鈴木優人さんの音楽への絶対的信頼が作品発想の原点にあって、曲頭のカバニーリエス『皇帝の戦争(バターリャ第1番)』は、感謝してやまない鈴木さんへのオマージュであり、愛聴してきた幼少からの無邪気な回想でもある。曲尾の旋律はイタリア軍の弔礼ラッパで、米軍とほぼ同じもの。3月イタリアでは陸軍のトラックが柩を各地の火葬場、墓地に運搬する際、墓地をあずかる市長がこの旋律で隊列を出迎えた。繰返された光景の記憶。以前からオーケストラは世界のように感じていたから、これを機に生きてきた半世紀を顧みたいと思った。

末筆ながら、主催者、一柳氏、関係者のみなさんの顔を思い浮かべながらこの作品を書いた。困難な状況を乗り越え、実現に尽力して下さったフェスティバルに関わる全ての方々に、心からの敬意と深謝をお伝えしたい。

[杉山洋一]

3 Fl / 3 Ob / 3 Cl / 3 Fg - 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Tub - 3 Perc (3 Bass Drums / 3 Anvils / 3 Big Metal Sheets / 3 Sets of Suspended 4 Tubular Bells / 3 Church Bells or 3 Tubular Bells) - Strings (14-12-10-8-6)

※ 上記に掲載の編成情報はオリジナルの楽譜に基づいています。

●一柳 慧 (1933~)

オーケストラのための 交響曲第11番「^{ピュシス}φύσις」(2020)

曲は3つの楽章から成る。それぞれの楽章には「ピュシス」にちなんだ数多くのテーマやテーマ性の断片をイメージした素材がちりばめられており、次々と出現しては消えてゆく。

人類にとって自然は、私達自身の身体が分かち難く結びついたものであり、人間が自然の分身の一部であることを考えると、それは何か別の独立した存在でないことは明白である。だが、ホモサピエンスである人間は、脳を働かせることによって、人工的別世界の疑似的自然をつくり上げ、実際の自然をゆがめたり、開発したり、破壊することでコントロールを行なおうとしている。その異和性から育まれてくる未知な矛盾や不条理な世界を、調和に富んだ音によって少しでも回復できるようにするには何が可能だろうか。11番の問いは、まだ先へ続く。

[一柳 慧]

3 Fl (Picc) / 3 Ob (E-Hrn) / 3 Cl (Bs-Cl) / 3 Fg (C-Fg) - 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb (Bs-Trb) / Tub - Timp / Bass Drum / Snare Drum / Tom-Tom / Mar / Xyl / Vib / Glock / Tam-Tam / Cym / Tubular Bells / Wood Blocks / Tri / Conga - Pf (Cel) - Strings